

痛みのない

健やかな毎日を目指して

クオリティ オブ ライフ / 生活の質

QOLの向上を助ける

# 人工股関節置換術

股関節のつらい痛みの治療法の一つ、人工股関節置換術について、整形外科専門医の小川博之先生にお話を聞きました。

## 日々進歩する医療技術と人工股関節

加齢とともに増える、歩けなくなるほどの股関節の痛み。その原因で最も多い変形性股関節症は、軟骨がすり減り骨同士が擦れて起こります。その傷んだ部分を削り取って人工股関節に置き換える手術は、整形外科では極めて一般的な治療法で、件数も年々増えています。しかし、この手術には脱臼という避けられない合併症が存在しています。私がかつては、よく患者さんに脱臼のリスクを説明したものです。しかし、2000年代に入って質の良いインプラントが次々と開発され、手術にもコンピュータが導入されて医療技術は格段に進歩しました。

大きなトラブルが解消されると、細かい症状が表立つもの。脱臼への不安が少なくなった今、これまで「の次とされてきた」「足が突っ張る」「左右の長さや向きが違う」など、術後の生活の質（QOL）を下げる結果を生み出さないよう、置換術は次のステージに進歩しています。「痛みが取れて、杖なしで歩けるようになった」ではなく、「手術をしたことを



三次元のCT画像を使った設計図

## 変形性股関節症と人工股関節



正常な股関節



軟骨がすり減り骨が変形した状態 (変形性股関節症)



骨の損傷面を取り除き、代わりに人工関節を固定 (人工股関節置換術)

忘れた」というレベルを目指しています。

それを可能に導くのが新しいテクノロジーです。従来はレントゲンによる術前の設計が主流でしたが、近年は三次元のCT画像を使い、より正確な設計が可能となりました。骨のどの部分をどう削り、どんなインプラントが適切かというシミュレーションができ、その整合率も極めて高い。この情報をナビゲーションに入力すると、手術中、患者さんの骨のどこをどう削っているか、見えない部分をモニター画面で正確に教えてくれます。手術をサポートするロボットの開発・導入も進んでいます。医師のテクニックと経験にこれらのテクノロジーが加われば、精度の向上が期待でき

患者さんのQOLを上げる手術を心掛けています



小川 博之 医師

北水会記念病院股関節センター長  
東京医科歯科大学医学部医学科卒  
日本整形外科学会認定 整形外科専門医

ます。ただし、ナビのセンサーを付ける分の傷が増え、手術時間が長くなるデメリットもありますので、かかりつけ医や最寄りの整形外科でご相談ください。手術後は毎年検診を行います。人工股関節には耐用年数があり、15年、20年経つと人間の骨も変わるため、インプラントを交換する再手術が必要になります。この再手術をいつ行うかを決めるのは医師の役目です。なぜなら、患者さんが痛みを感じる前に交換が必要になることもあるから。車の車検と同じですね。こうしたフォローアップも、手術を担当した医師が行えれば、患者さんもお心強いのではないのでしょうか。長く通いやすい病院を選ぶのもポイントと言えると思います。

医療法人社団 北水会  
北水会記念病院

茨城県水戸市東原3-2-1  
☎029(303)3003  
<https://hokusuikai-kinen.jp/>